エンカウンター・グループの発展段階尺度の作成¹

東京大学 林 も も 子²

Construction of a scale to measure the developmental phase of an encounter group

Momoko Hayashi (Department of Educational Psychology, Faculty of Education, University of Tokyo, Bunkyo-ku, Tokyo 113)

On the basis of a description by Murayama and Nojima (1977), a scale was constructed to measure the developmental phase of the encounter group process. Administered to 105 encounter group facilitators. Principal component analysis of the data resulted in the identification of one factor. The evaluation of a group as a whole and the rating of each item were found to be consistent. The rating of a high evaluated group was higher than that of a low evaluated group. These results confirmed the validity of the scale. The ratings by two judges of the same group were found to be significantly correlated. A test-retest (one year later) analysis yielded a reliability coefficient of 0.87, thus confirming the reliability of the scale.

Key words: encounter group, scale of the developmental phase of the group, co-facilitator relationship, questionnaire to the facilitators.

わが国では、エンカウンター・グループ³は、幅広い領域で実践されている。同時に、研究も盛んになりつつある。グループが成果がある、すなわち参加者にとって、成長促進的であるためには、グループが十分に展開することが重要である。

より成果のあるグループ実践のためには、グループの成果が何によってもたらされたかを研究することが重要である。そのためには、グループの成果をとらえる必要がある。グループの成果をとらえる研究方法としては、参加者の個人過程の変化からとらえる効果研究と、グループ全体の過程の展開をとらえる過程研究とがある。

効果研究においては、個人心理療法などにおいて、信頼性、妥当性が確かめられた尺度を用いて、グループ体験が、個人の心理的成長を促進する事が明らかにされている（例えば、梶瀬，1972，1974；東山，1972；野島，1975；高松，1982；大貝，1983；国分・西・村瀬・菅沼・国分，1987）。

一方、グループの成果を、グループ全体としてとらえる、即ちグループの過程がどの位十分に展開したかをとらえる過程研究は、現象記述に基づく仮説提示の段階にある（例えば、Rogers 著 梶瀬・梶瀬訳，1970；Beck，1974；村山・野島，1977；梶瀬，1977；小谷，1978；亀石・茂田・村山，1981；細江，1981）。しかし、グループの成果をグループ全体としてとらえる尺度として、信頼性と妥当性を十分にそなえたものはまだない。

このような尺度は、実践上、次のような意味で重要である。ファシリテーターが自らのグループ実践を振り返る際、グループの成果については、個人的経験に基づいて、グループの成果についての主観的判断を行い、それを基準にグループの成果に影響を及ぼした諸要因を検討しているのが現状である。従って、より一般的、客観的にグループの成果をとらえ、成果に影響を及ぼした諸要因を検討して、その知見を他のファシリテーターと共有し、グループの実践に生かすためには、ファシリテーターが共有できるような、信頼性と妥当性をそなえた、グループ展開をとらえる尺度を作成することが必要である。

そこで、本研究は、エンカウンター・グループの成果

¹ 本論文は、1985年度東京大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部に基づいている（林，1985）。

² 本論文の作成にあたり御指導いただきました東京大学芝 祐順教授、近藤邦助教授、永田隆雄さんに感謝いたします。また、本研究の調査に御協力いただいたファシリテーターの方々に感謝いたします。

³ エンカウンター・グループについての定義はいくつかあるが、ここでは、保坂（1983）が定義したグループ・アプローチのひとつとしてエンカウンター・グループを次のように定義する。エンカウンター・グループとは、①人工的な小集団（通常、8人-12人の小グループ）の基本的な場において、②来談者中心的な立場の集団のリーダー（ファシリテーターと呼ばれる。1人-数人）を含めたメンバー間の相互作用を媒介として、③各メンバーの精神的成長（パーソナリティの健全化および成長、個人的悩みや問題行動の解決、改善）の促進を目的とする、グループ・アプローチである。

をとらえる目安、枠組みとしてグループ過程の展開を全体としてとらえることが出来る、一般性のある尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的として行った。

方 法

グループ発展段階尺度の作成

村山・野島(1977)が記述した“エンカウンター・グループ・プロセスの発展段階仮説”にもとづいて、グループ発展段階尺度を作成した。⁴ エンカウンター・グループ・プロセスの記述には、Rogers 著 畠瀬・畠瀬訳(1970)、Beck(1974)、村山・野島(1977)、畠瀬(1977)、小谷(1978)、亀石・茂田・村山(1981)、細江(1981)があるが、この中で村山・野島(1977)の記述を選んだのは、この記述が、7年間にわたる広い臨床データにもとづいている事、段階Ⅳ以上に展開したかどうかで、終結段階が分けられており、これがグループの成果があったかどうかの目安となる事、筆者の臨床経験から内容的な妥当性が高いと判断した事による。⁵

村山・野島(1977)は、エンカウンター・グループ・プロセスの発展段階を、

- I 当惑・模索
- II グループの目的・同一性の模索
- III 否定的感情の表明
- IV 相互信頼の発展
- V 親密感の確立
- VI 深い相互関係と自己直面

という6段階に分け、これに、

- Ⅶ 終結段階 A、段階Ⅳ以上に展開したグループ
- B、段階Ⅳまで展開しなかったグループ

を加えている。段階Ⅳ以上に展開したグループの終結段階では、個人は満足感を持ち、相互作用は率直で直接的でしっくりして、雰囲気は、まとまった、心地よいものである。段階Ⅳまで展開しなかったグループの終結段階では、個人は不満感を持ち、相互作用はちぐはぐで、雰囲気はおさまりがつかない、不満足で充実感に欠けたものである。

筆者は、段階Ⅳ以上に展開したグループが、成果のあったグループである、と考え、段階Ⅳ以上に展開したグループの特徴を、村山・野島の記述の中から取り出して、グループ発展段階尺度案を作成した。

⁴ 本研究に際し、この論文にもとづいてグループ発展段階尺度を作成するにあたっては、野島氏の御了承を得た。村山氏は当時英国に留学だったため、事後承諾を得た。両氏に感謝いたします。

⁵ グループ・プロセスの内容的妥当性の判断については、男性3人、女性2人、20代後半-40代前半のファシリテーター5人の協力を得た。

Table 1
グループ発展段階尺度

そのグループは、以下の点について、7段階で評定するとすれば、いくつでしょうか。1を最低(そういうことは、全くない、そういう人はいなかった、など)、4を普通(どちらともいえない、まあまあ半数位の人がそうだった、など)、7を最高(そういうことが非常にあった、全員がそうだった、など)とします。

- A. 自由で自発的な発言の活発さ
- B. かなり重要な自己の問題や内面を語った人の数
- C. 語られた話の、語った人にとっての重要性、深さ(全体の平均ではなく、最も深い話をした人について)
- D. 他者に対する傾聴
- E. 他者に対する自由で自発的なフィードバック
- F. 発言の率直さ(here and nowの気持ちの表現)
- G. ファシリテーター自身がメンバーの1人として動けるという感じ
- H. メンバーの、ファシリテーターもメンバーの1人だという感じ
- I. グループに対してかなり満足感を持った人の数
- J. グループに対する満足感の深さ(全体の平均ではなく、最も深い満足感を持った人について)
- K. グループの安心感、心地よい雰囲気、相互の信頼
- L. グループの親密感
- M. グループのまとまりと連帯感

次に、作成した尺度案を、予備的に、9人のファシリテーター(男性7人、女性2人、20代後半-40代前半で、ファシリテーター経験2-10年)に示し、各項目の内容的妥当性について、意見や感想を求め、これを参考にして、尺度項目を修正した。その結果、Table 1に示したようなグループ発展段階尺度を作成した。

グループ発展段階尺度の妥当性と信頼性の検討

①妥当性 ここでは、ファシリテーターによるグループの成功度評価を基準として、グループ発展段階尺度評定値の高低が、この基準の高低と対応していることをもって、グループ発展段階尺度の妥当性の評価とする。

②信頼性 ここでは、次の3つの観点からグループ発展段階尺度の信頼性を評価する。

(1) 2人の評定者による尺度評定値の一致

あるグループの、2人のファシリテーターによる、そのグループの評定値がよく一致していること。

(2) 時間経過の影響がないこと

2人のファシリテーターによるグループの評定値のズレの大きさに対するグループ実施時期の影響がないこと

(3) 再調査による評定値の安定性

1年後に同じグループを再度評定した評定値が、最初

の評定値とよく一致して安定していること、及び、再評定値と、もとの評定値の相関が高いこと

③手続き

(1) 第一段階

対象：エンカウンター・グループのファシリテーター経験者 147 人。

質問紙：次の 4 種類のグループを思い出すように教示し、それらについてのグループの発展段階の尺度評定と各グループのコ・ファシリテーターの名前・住所・連絡先の記入を依頼した。

GR：一番最近ファシリテーターをしたグループ。

G1：今までにファシリテーターをした中で、最もよかったと思うグループ。

G2：今までにファシリテーターをした中で、まあまあだったと思う、3—5 年前のグループ。

G3：今までにファシリテーターをした中で、最も不満足だと思うグループ。

返信用の封筒と、村山・野島 (1977) のグループ発展段階仮説についての資料を同封して郵送した⁶。

実施時期：1985 年 9 月。

回答数：60 人 (男性 48 人、女性 12 人)、187 例の回答を得た。GR 49 例、G1 48 例、G2 45 例、G3 45 例⁷ の回答を得た。

(2) 第二段階

対象：第一段階の 60 人の回答に記入されていたコ・ファシリテーター 114 人 (第一段階の回答者 60 人、新たに依頼した回答者 54 人)。

質問紙：第一段階の 4 種類のグループ別は記入せず、“何年何月どこで誰 (第一段階の回答者) と行ったグループ” の尺度評定を依頼した。返信用の封筒と、村山・野島 (1977) のグループ発展段階仮説についての資料を同封して郵送した。

実施時期：1985 年 10 月—11 月。⁸

⁶ この資料とは、村山・野島 (1977) のグループ発展段階仮説の記述の部分である。調査依頼文に、評定尺度を村山・野島 (1977) に基づいて作成した事を書いたが、その際、村山・野島 (1977) のグループ発展段階仮説を知らない方のために、“詳細については、別紙を参照してください” として、資料を付けたものである。

⁷ 60 人の回答の中には、4 種類のグループのうち、幾つかの種類についてだけの回答や、GR と、他の 3 種類のいずれかが同じグループについての回答も含まれている。後者については、G1—G3 の回答として処理した。また、同じグループについて、第一段階の回答者どうしが相互に選択していた例が、GR 2 例、G1 3 例、G2 3 例、計 8 例あった。さらに、片方の回答者が G1 “最もよかったグループ” としてあげたグループを、もう片方の回答者は G3 “最も不満足だったグループ” としてあげていたものが、2 例あり、集計から除外した。

回答数：71 人 (男性 53 人、女性 18 人)、80 例の回答を得た。そのうち、GR 19 例、G1 19 例、G2 23 例、G3 19 例だった。

(3) 第三段階

対象：第一段階及び第二段階で回答があったファシリテーター 105 人。

質問紙“約 1 年前に答えていただいた、何年何月どこで誰々となされたグループについて、前回の答えのメモやコピーは見ないで” という教示で、再評定を依頼した。返信用の封筒と、村山・野島 (1977) のグループ発展段階仮説についての資料を同封して郵送した。

実施時期：1986 年 10 月。

回答数：57 人 (男性 45 人、女性 12 人)、147 例の回答を得た。1985 年の第一段階の回答者から、GR 34 人、G1 22 人、G2 31 人、G3 22 人、1985 年の第二段階の回答者から、GR 13 人、G1 8 人、G2 8 人、G3 9 人の回答を得た。

同じグループについての 2 人の回答を得たのは、28 例であり、GR 8 例、G1 5 例、G2 8 例、G3 7 例だった。

結 果

妥当性の検討

①尺度の内部一貫性の検討 項目 A—M の中に、グループの発展段階の評価を測定するために妥当でないものがあるかどうかを調べるために、1985 年の第一段階の 187 例のグループの評定値について、主成分分析を行った。その結果、Table 2 に示したように、第一主成分に 13 項目全てが高い負荷量を示し、さらに、寄与率は、第一主成分が 65.1%、第二主成分が 7.2%、第三主成分が 6.0%、以下、第四主成分からは 5% 以下だった。従って、この項目群は、一因子性のかかなり高い尺度を構成すると考えられる。因みに、1985 年の第二段階の回答 80 例、1986 年の第一段階の回答 109 例、第二段階の回答 38 例についてもそれぞれ主成分分析を行ったところ、寄与率は、第一主成分が 61.6%、69.6%、68.8%、第二主成分が 7.1%、5.9%、8.4% で一因子性が高かった。

②グループの成功度評価と各項目の評定値の対応 G1 最もよかったグループ、G2 まあまあだったグループ、G3 最も不満足だったグループ、というファシリテーターの判断を、グループ成功度評価と呼ぶ。各評定者の中で、グループの総合評価である成功度評価と、尺度の各項目の評定値が対応しているかどうかを調べた。

⁸ 第一段階の各回答の回収 (郵送) 後、すぐに第二段階の質問紙を郵送するという手続きで実施した。第一段階の各回答の回収時期が、10—11 月の約 2 カ月間の幅があった。

Table 2
主成分分析の結果 (1985 第一段階)

項 目	A	B	C	D	E	F	G
因子負荷量	.68	.55	.41	.57	.71	.65	.56
項 目	H	I	J	K	L	M	
因子負荷量	.59	.73	.63	.80	.79	.79	

1985 年の第一段階の回答の G1 48 例, G2 45 例, G3 45 例, の各項目ごとの平均値を求めた。さらに, 各グループごとに, 全項目の評定値の平均値を求め, その G1, G2, G3 の平均値を求めた。Fig. 1 に, その結果を示した。図中, 項目の配列順序は, 最もよかったグループと評価した群における項目の評定値が大きいものから順に並べて表した。Fig. 1 から明らかなように, グループの成功度評価が高い群の方が, グループ発展段階の各項目の評定値が高い, という対応関係が見られた。

また, 各項目ごと及び各グループの平均値について, G1, G2, G3 の 3 群の有意差を調べるために, 分散分析を行った。その結果, 全項目及び平均について, グループの成功度評価による 3 群の評定値の間に, 危険率 1% 以下の有意差があった。結果を Table 3 に示した。

因みに, 1986 年の第一段階の回答 75 例についても同様の処理を行った結果, 1985 年の結果と同様に, グループの成功度評価が高い方が, グループ発展段階の各項目の評定値が高い, という対応関係が見られ, また, 分散分析の結果, 全項目及び平均について, グループの成功度評価による 3 群の評定値の間に, 危険率 1% 以下の有意差があった。

③グループの成功度評価とグループ発展段階尺度の評

Fig. 1. グループの成功度とグループ発展段階尺度の評定値 (1985 年第一段階).
注) Tとは, 評定項目の評定値の平均を表す。

定値 グループ成功度評価を基準とした時, グループ発展段階尺度の評定値が, グループ成功度評価の高低と対応しているかどうかを調べた。グループ成功度評価と独立に得た 1985 年の第二段階の回答 61 例について以下の処理を行った。G1 19 例, G2 23 例, G3 19 例, の 3 群のグループについて, それぞれ, 各項目ごとの平均値を求めた。各グループごとに, 全項目の評定値の平均値を求め, その G1, G2, G3 の 3 群の平均値を求めた。Table 4 および Fig. 2 に, その結果を示した。項目配列の順序は Fig. 1 と同じとした。Fig. 2 から明らかなように, 1985 年の第二段階の回答においても, グループの成功度評価が高い方が, グループ発展段階の評定値が高い, という対応関係が見られた。

また, 各項目ごと及び各グループの平均値について, G1, G2, G3 の 3 群の有意差を調べるために, 分散分析を行った。その結果, グループの成功度評価により, 項目 C, D, H, I, J, K, L, M において危険率 1% 以下, 項目 F, G において危険率 5% 以下の有意差がみられた。項目 A, B, E には有意差がみられなかった。この結果を Table 4 に示した。

信頼性の検討

①2人の評定者による評定値の一致 1985 年の回答における 88 例 (第二段階の回答があった 80 例および第一段階の回答者どうしが相互に選択していた 8 例) の 2 人のファシリテーターの評定値の間には, D, G 以外の全項目および平均値において, 5% 以下の危険率で有意な, .22-.57 の相関があった。この結果を, Table 5 に示した。

次に, 1985 年の回答における 88 例の 2 人のファシリテーターの評定値の差, 即ちズレの絶対値は, 平均が 1.12, 分散が .55 だった。⁹

さらに, 1985 年の回答について, グループ成功度評

Fig. 2. グループの成功度とグループ発展段階尺度の評定値 (1985 年第二段階).
注) Tとは, 評定項目の評定値の平均を表す。

Table 3

1985 年, グループ成功度評定群別のグループ発展
段階尺度評定値 (第一段階の評定者による)
と分散分析の結果

項目	グループ発展段階尺度 評定値のグループ成功 度評定群別平均			分散分析の結果		
	最もよ かった グルー プ	まあま あだった グルー プ	不満 だった グルー プ	df	F	p
A	5.63 (.99)	5.11 (.90)	3.89 (1.09)	2/134	35.66	**
B	5.29 (1.29)	4.51 (1.11)	3.53 (1.44)	2/135	21.27	**
C	6.21 (1.02)	5.62 (.95)	5.24 (1.16)	2/135	9.85	**
D	5.77 (.77)	5.02 (.83)	4.04 (1.07)	2/135	42.09	**
E	5.67 (.90)	4.93 (.85)	3.71 (1.11)	2/135	58.05	**
F	5.81 (.95)	5.00 (.82)	4.13 (1.07)	2/135	35.50	**
G	5.58 (.93)	4.96 (1.05)	3.04 (1.25)	2/135	67.15	**
H	5.42 (1.08)	4.69 (1.11)	3.02 (1.24)	2/135	51.96	**
I	5.90 (.74)	4.82 (.96)	3.38 (1.12)	2/134	80.15	**
J	6.42 (.70)	5.44 (1.07)	4.31 (1.38)	2/135	43.35	**
K	6.13 (.67)	5.09 (.78)	3.11 (1.06)	2/135	147.03	**
L	6.08 (.70)	5.02 (.77)	3.40 (1.06)	2/135	112.41	**
M	6.00 (.89)	4.84 (.84)	3.22 (1.01)	2/135	105.12	**
平均	5.85 (.58)	5.01 (.70)	3.70 (.75)	2/135	115.18	**

** $p < .01$ () 内は標準偏差

Table 4

1985 年, グループ成功度評定群別のグループ発展
段階尺度評定値 (第二段階の評定者による)
と分散分析の結果

項目	グループ発展段階尺度 評定値のグループ成功 度評定群別平均			分散分析の結果		
	最もよ かった グルー プ	まあま あだった グルー プ	不満 だった グルー プ	df	F	p
A	4.95 (1.19)	4.87 (1.23)	4.05 (1.61)	2/58	2.51	.090
B	4.79 (1.32)	4.35 (1.17)	3.79 (1.28)	2/58	2.90	.063
C	6.32 (1.02)	5.48 (.95)	5.32 (1.16)	2/58	5.05	.009**
D	5.84 (.81)	4.74 (1.29)	4.89 (1.02)	2/58	5.82	.005**
E	4.58 (1.31)	4.57 (1.10)	3.95 (1.10)	2/58	1.78	.178
F	5.42 (1.14)	4.83 (1.20)	4.26 (1.29)	2/58	4.12	.021*
G	5.17 (1.67)	4.65 (1.27)	4.00 (1.08)	2/57	3.29	.044*
H	5.16 (1.18)	4.09 (1.47)	3.42 (1.35)	2/58	7.64	.001**
I	5.42 (.82)	4.64 (1.37)	3.94 (1.39)	2/56	6.38	.003**
J	6.16 (.99)	5.52 (1.10)	4.42 (1.23)	2/58	11.40	.000**
K	5.37 (1.18)	4.52 (1.25)	3.89 (1.17)	2/58	6.86	.002**
L	5.63 (1.04)	4.70 (1.33)	4.05 (1.47)	2/58	6.81	.002**
M	5.58 (1.27)	4.52 (1.25)	4.00 (1.56)	2/58	6.38	.003**
平均	5.39 (.76)	4.68 (1.04)	4.18 (1.07)	2/58	7.03	.002**

** $p < .01$ * $p < .05$ () 内は標準偏差

Table 5

2 人の評定者の評定値の相関 (1985 年のデータ)

項 目	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
相 関 係 数	.39	.36	.22	.14	.32	.23	.19	.26	.55	.37	.57	.53	.53	.50
有 意 水 準	.00	.00	.04	.19	.00	.03	.08	.02	.00	.00	.00	.00	.00	.00
	**	**	*	**	*	*		*	**	**	**	**	**	**

** $p < .001$ * $p < .05$

価による 3 群のグループの評定値のズレを比較した。各

⁹ 1986 年の回答に於ける, 28 例の 2 人のファシリテーターの評定値のズレの絶対値は, 平均 1.18, 分散が, .63 だった。

項目のズレについて, また, 各グループごとにズレの平均値について, 分散分析を行った。その結果, 各項目, 平均共に, グループ成功度評価による 3 群間の有意差はなく, 評定値のズレに対するグループの成功度評価の影

Table 6
グループ成功度評価のグループ発展段階尺度
評定の安定性への影響と *t* 検定の結果

グループ 成功度評価	グループ発展段階 尺度評定値		<i>t</i> 検定の結果		
	1986年 平 均	1985年 平 均	<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>
最もよかった グループ	6.01 (.53)	6.01 (.58)	.00	42	1.00
まあまあだった グループ	4.85 (.75)	4.89 (.61)	.23	60	.82
不満足だった グループ	3.93 (.75)	3.79 (.67)	.64	42	.53

() 内は標準偏差

響はなかった。

②時間経過の影響 1985 年の回答について、各グループの評定値のズレの平均値の、グループが行われてから調査実施までの経過月数への回帰係数は、.00 だった。

評定値のズレ = $-0.000 \times (\text{経過月数}) + 1.12$

③再調査による評定値の安定性 1986 年の回答 147 例と、それに対応する 1985 年の回答 147 例について、評定値の安定性を見るために、各項目ごと、及びグループごとの平均値について、有意差を調べた。*t* 検定の結果、各項目、平均値共に、有意差はなく、評定値は安定性が高かった。さらに、グループ成功度評価による 3 群における平均値の有意差を調べた。*t* 検定の結果、いずれも有意差はなく、グループ成功度評価に関わらず、評定値の安定性は高かった。その結果を Table 6 に表した。

次に、1985 年と 1986 年の対応する回答 147 例について、各項目ごと、及びグループ全体について、信頼性係数（相関係数）を求めた。その結果を Table 7 に表した。この尺度の信頼性係数は、.87 だった。

以上の信頼性と妥当性の検討において、1986 年の回答で、回答数が 30 に満たないものについては、処理しなかった。

考 察

妥当性について グループの成功度評価と各項目の評定値が対応していたこと、グループの成功度評価が、成功度評価と独立に評定した評定値と対応していたことから分かるように、全体としては、グループ発展段階尺度の妥当性は、かなり高いと言えよう。

ただし、項目 D “他者に対する傾聴” で、成功度評価が中間だった G2 の評定値が、成功度評価が低かった G3 の評定値より低い、という逆転が見られた。また、

Table 7
信 頼 性

項 目	A	B	C	D	E	F	G
<i>r</i>	.73	.67	.58	.61	.77	.61	.66
項 目	H	I	J	K	L	M	平均
<i>r</i>	.72	.80	.60	.81	.83	.78	.87

項目 A “自由で自発的な発言の活発さ”，項目 B “かなり重要な自己の問題や内面を語った人の数”，項目 E “他者に対する自由で自発的なフィードバック”において、グループ成功度評価による 3 群の評定値に有意差が無かった。これらの項目は、グループの中での相互作用、対人関係の側面をとらえていると考え、そういう側面は、他の項目がとらえている側面（個人の心理的なレベルや、グループ全体の雰囲気など）に比べると、グループの成功度との関連が小さいと考えられる。

因みに、項目 I “グループに対してかなり満足感を持った人の数”，項目 K “グループの安心感，心地よい雰囲気，相互の信頼”，項目 L “グループの親密感”，項目 M “グループのまとまりと連帯感”においては、成功度評価による 3 群の間に、危険率 1% 以下で有意差が見られ、また、因子負荷量も 13 項目の中で、最も高かった。従って、これらの項目 I, K, L, M は妥当性が高いと考える。これらの項目は、グループ全体の雰囲気をとらえるものと考えられ、この雰囲気は、グループ全体の成功度との関連が大きいとさえいえる。

しかし、項目 D, A, B, E は、グループの成功度評価との関連は比較的小さかったものの、因子負荷量は、他の項目に比べて特に低いという事は無かった事から、尺度の項目として、妥当であると考えられる。

次に、評定項目 C “語られた話の、語った人にとっての重要性，深さ（全体の平均ではなく、最も深い話をした人について）”において、因子負荷量がやや低かったこと、グループ成功度評価による 3 群の差が、他の項目に比べて小さかったことは、この項目がファシリテーターがグループ全体としてとらえたグループの成功度との関連が比較的小さいことを示唆している。

ただし、項目 C の因子負荷量は、低いといっても .41 あり、また、成功度評価による評定値の有意差もあり、評定者間の相関も有意である。従って、項目 C が全く妥当性に乏しいとはいえない。

項目 C の妥当性が低かったのは、この項目が、各メンバーにとっての、そのグループの個別的な意味であると考えられ、その多様性をとらえるには、グループ全体を研究対象として測定する尺度では限界があるからであると考えられる。即ち、グループの成果をとらえる、一般

性を持った尺度とするために、個別性や多様性が反映しにくい数量化、単純化をするという方法自体が、項目Cでとらえようとした、個人の心理内的、かつ全人格的なレベルの繊細な内容をとらえられないという粗さ、限界を持っているからだろう。各個人にとってのグループの意味をきちんととらえるためには、事例研究やフォロー面接などの個別性をきめ細かく共感的にとらえることが出来る方法がより適している。

しかし、メンバーの心理的成長を目指すエンカウンター・グループのファシリテーターとしては、個人の内的な深まりは、グループをとらえる1つの重要な視点であり、この尺度の内容的妥当性を確保するためには、項目Cは、不可欠の項目である。ただし、項目Cそのものの妥当性を高めるために、“重要”“深い”などの言葉の意味を明確化、精緻化する事が今後の課題である。

この尺度の妥当性については、“グループはその参加者個人により、意味や評価が全く異なるものなので、ファシリテーターだけに評定させるのはおかしい”という意見が回答者の数人から寄せられた。これは、尺度の妥当性を検討するための基準が、ファシリテーターひとりによるグループ成功度評価の判断であり、その判断の主観性についての疑問である。より客観的にこの尺度の妥当性を検討するためには、基準として、グループが行われた直後の、メンバー全員による評価、または、グループの録音テープや、逐語録に基づく、複数の第三者による評価、が必要である。

しかし、グループの成功度評価の高低、グループ発展段階尺度各項目の評定値の高低が対応していた、という結果から、少なくとも、この尺度が、専門家としてのファシリテーター 60 人の経験に照らしてグループの成果をとらえる目安・枠組みとして、有効だった、という意味で妥当性が支持された、といえよう。さらに、グループの成功度評価の高低と、これとは独立に評定した評定値の高低がほぼ対応していた事、とくに、成功度評価が高かった G1 のグループの評定値が、全項目、および平均値において、成功度評価が低かった G3 のグループの評定値よりも高かった事から、この尺度が、成功度が高いグループと低いグループの違いを測る尺度としては、十分に機能していることがわかる。

信頼性について 結果から、2人の評定者によるグループ発展段階尺度の評定値の間には、項目D“他者に対する傾聴”と項目G“ファシリテーター自身がメンバーの一人として動ける感じ”を除く全項目および平均値において危険率 5% 以下で有意な、.22-.57 の相関が見られた。項目Gに有意な相関がみられなかったのは、この項目がファシリテーター個人のありかたについての感じなので、“ひとりの人間として参加する”(Rogers, 1970) エンカウンター・グループのファシリテーターと

して出てきた個人の違いの結果だろう。項目D“他者に対する傾聴”に有意な相関が見られなかったのは、この点に関するファシリテーターの見方が、この尺度の他の項目に比べて、個人差を反映しやすい事を示唆している。しかし、この2項目は、妥当性、再検査信頼性などは他の項目同様に高かったため、尺度の項目として削除はしなかった。逆に、項目I, K, L, M において、.5以上の、高い相関が見られた。これらの項目において、ファシリテーターの見方が一致しやすかった事は、先にのべた、これらの項目の妥当性の高さを支持している、と考える。

2人の評定者間のズレが 1.12 と、小さかった事もあわせて考えると、全体としては、この尺度は、2人の評定者の評定がかなり一致していると考ええる。さらに、時間経過やグループ成功度評価の影響もみられなかった事、再調査による安定性が .87 と高かった事から、この尺度は、信頼性が高いといえる。

以上、グループ発展段階尺度を作成し、その妥当性と信頼性を調べた。その結果、この尺度は、妥当性、信頼性の点において十分に評価しうるものであることが明らかになった。この尺度を基準として用いて、グループの成果に影響を及ぼす要因の研究をすることが出来る。また、ファシリテーターがグループ経験をふりかえる時の目安として、この尺度は、有効なものであると考えられる。今後さらに、この尺度の妥当性、信頼性を高めるために、事例に即して項目の検討を進め、特に項目Cを精緻化する事、また、グループの成果を測定する他の尺度を基準として、この尺度項目を検討していく事が課題である。

引用文献

- Beck, A.P. 1974 Phase in the development of structure in therapy and encounter groups. In D.A. Wexler et al. (Eds.), *Innovation in client-centered therapy*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 421-463.
- 畠瀬直子 1972 エンカウンター・グループの効果性に関する研究——Q技法による経験内容の検討(I)——京都大学教育学部紀要, 18, 220-230.
- 畠瀬直子 1974 エンカウンター・グループの効果性に関する研究——Q技法による経験内容の検討(II)——日本心理学会第 38 回大会発表論文集, 652-653.
- 畠瀬直子 1977 ジェネラル・エンカウンター・グループ 村山正治(編) エンカウンター・グループ 福村出版 Pp. 23-41.
- 林 もも子 1985 エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の問題 東京大学大学院教育学研究科修士論文(未公開)
- 東山紘久 1972 エンカウンター・グループにおける自己および対人知覚の変化 大阪教育大学紀要(第一部

- 門), **21**, 135-144.
- 保坂 亨 1983 エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの問題について 心理臨床学研究, **1**, 30-40.
- 細江達郎 1981 グループ発展過程とグループ構成 佐治守夫・村上英治・福井康之(編) グループ・アプローチの展開 誠信書房 Pp. 3-17.
- 亀石圭志・茂田 みちえ・村山 正治 1981 BASIC ENCOUNTER GROUP の発達過程に関する一考察——対集団魅力度の構造を手掛かりとして—— 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **25**(2), 51-61.
- 国分康孝・西 昭夫・村瀬 晏・菅沼 憲治・国分 久子 1987 大学生の人間関係開発プログラムに関する男女の比較研究 相談学研究, **19**, 1-13.
- 小谷英文 1978 エンカウンター・グループ・プロセス論に向けて(1) 広島大学総合科学部学生相談室活動報告書, **3**, 13-25.
- 村山正治・野島一彦 1977 エンカウンター・グループ・プロセスの発展段階 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **21**(2), 47-55.
- 村山正治・野島一彦・安部恒久・岩井 力 1979 日本における集中的グループ経験研究の展望 実験社会心理学研究, **18**, 139-152.
- 野島一彦 1975 エンカウンター・グループにおける Self-Esteem の変化と関係認知 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **20**(1), 41-48.
- 大貝 薫 1983 エンカウンター・グループにおける個人プロセスに関する一研究——Personal Orientation Inventory を手掛かりとして—— 九州大学教育学部卒業論文(未公刊)
- ロジャース C. R. 梶瀬 稔・梶瀬直子(訳) 1982 エンカウンター・グループ——人間信頼の原点を求めて—— ダイアモンド社
(Rogers, C. R. 1970 *Carl Rogers on encounter group*. New York: Harper & Row.)
- 高松 里 1982 エンカウンター・グループにおける体験内容目録の作成とその適用の試み 九州大学研究生論文(未公刊)

——1987. 11. 5. 受稿, 1988. 9. 10. 受理——